

100年後の宗教施設の役割とその施設の提案

システム工学群 建築・都市デザイン専攻 重山研究室

1150148 本岡 誉登

1. 背景

私は元々宗教施設に興味があり、古代の出雲大社について調べたところ、現在の社殿との違いと60年に一度の式年遷宮について知ることが出来た。そこで、時代による宗教建築の移り変わりに興味をわいてきたので、過去・現在の宗教施設をもとに未来の宗教施設とはどのようなものかを構想した。

2. 目的

100年後の世の中が一体どうなっているかを仮定し、その世界では人々が何に対して祈り、何を心の拠り所に行っているのかを考える。そして時代の推移による宗教施設の変化を考察し、その時代に合う宗教施設の提案を行う。

3. 100年後の世界とは

100年後の世界は現在よりもはるかにコンピュータによる制御が進み、人間よりも頭のいいロボットや核融合、デジタル世界での学校などが当たり前となっている。調理や洗濯といったかつては家事といわれていたものも自動化が進み、人々は苦勞することなく快適な生活を行うことが出来る。車の自動運転化は当然のこと、製造工場もすべてロボット化が進み、事故が極端に減少することになる。

医療分野もより発達し、体の一部をスペアパーツとして交換可能な技術や老化の抑制によって人類の寿命も飛躍的に伸びる。また、宇宙への進出も進み、月や火星などには試験的に人間が居住する施設が複数存在している。

これらの例に挙げられるように、人類はやろうと思えばほぼ何でもできるようになった世界であると考えられる。

4. 宗教施設の推移

100年後の世界、つまり「ほぼ何でもできる世界」では人々はいったい何に祈りを捧げるのか。古代から

の人々の信仰対象をもとに構想する。

まず古代では「大きさ」「高さ」などが重要視され、巨木や巨石に神様が宿ると考えられていた(図1)。

また、当時の人々が恐れていたものは、主に異常気象や病気などであり、その原因が不明であったため「神の怒り」として恐れられていた。

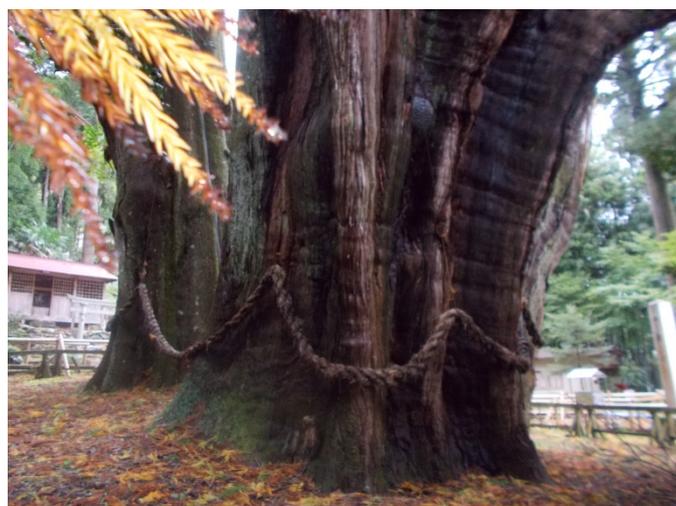


図1 高知県大豊町「杉の大杉」

中世から現代にかけては「奥ゆかしさ」というものに重きが置かれ、「奥の思想」に代表されるようにより深い所、奥まったところに神様がいると考えられた。また、人々が普段祈りを捧げる神社とは別に山の奥に「奥宮」という本当に神様がいるとされる施設が存在することもある。中世では人間の寿命はおよそ50年程度であり、この時代も気象や病気を恐れていたと考えられるが、古代と比較すると建物の発達や薬の誕生によりある程度の被害は抑えることができた。恐れるものとしては、例えば古代の人々が洪水を恐れていたのに対して、堤防の決壊を恐れるなど対策が十分であるかどうかを心配することが多くなった。

そして現代では、天候に関してはかなりの制度で予測が可能になり、手段を選ばなければある程度操することもできる。医療技術も発達し、多くの怪我や病気を適切に処置することで人類の平均寿命は80年近くにまで伸びた。また、地震や日食などの現象も科学的視

点からメカニズムが解明されており、昔の人に比べて対策や予測ができる分、脅威としてのレベルは大幅に下がったといえる。

いつの時代でも人々は「自分たちの力が及ばないもの」に対して祈りを捧げている。100年後の世界とは先に述べたように「ほぼなんでもできる世界」である。ある意味人類が全知全能の神に近いような世界では、神様への信仰は薄れてしまっているだろう。しかし、人間には必ず新たな世界の開拓欲や探究欲というものが存在し、その行先は未知の世界である。つまり、一時的に全知全能でない状態にあるということである。

その中で神様に心から祈るのに必要なのは人間の知恵や技術との関係を一時的に絶ち、人間本来の姿で内省を促すことのできる空間であると考えた。

5. 宗教施設の役割

では100年後の宗教施設に求められること、すなわちどうすれば人々は神様に祈るかを考える。まず、最も重要なのは人々が「何でもできる」状態から脱出することである。少なくとも、自分たちの力で大概の壁を乗り越えられる状況では神様に祈る必要性が無いからだ。

そこで考えられるのがコンピュータをはじめとする、人の知恵や技術に依存できない状況を作り出すことである。現在で例えれば電子機器（スマートフォンやパソコン、テレビなど）を一切使えないようにするといったところだ。

次に必要なことは人間が本来恐れていたものが何かを知る、ということである。100年後はコンピュータによる危険を事前に処理する力が現代より遥かに高まり、人類は日常生活で遭遇する危機的状況はほぼ皆無といってよい。そのような、ある意味過保護な生活をしてきた人々に、本来の自分たちの力ではどうにもならないものとは何かを気付かせることで、世界における自分の立ち位置を再確認してもらうことが重要である。その方法としては原始的な道具のみを持った状態で未開の地に踏み込み、そこで生活するというのが挙げられる。サバイバル空間にその身一つで乗り込み一定期間生活し、様々な苦労を経験することで人間が本来何を何故神様に祈るのか、その本質を理解することができるだろう。

そして最後に、自分というものを再認識するのに必要なのは、静かで外部からの雑音がない、自然と自分の内側に気持ちが向くような空間である。これは祈りの場において必須条件であると考えられる。ここで神様に祈りを捧げ、参拝者の内省を促すことがこの宗教施設全体の存在意義である。

上記の考察を補強することを目的とし、私は4日間スマートフォンとパソコン、その他電子機器を一切使わない状態で人間の思考変化を記録する実験を行った。

実験方法はスマートフォンとパソコンを他人に預かってもらい、その期間中に日記をつけることとした(図2)。

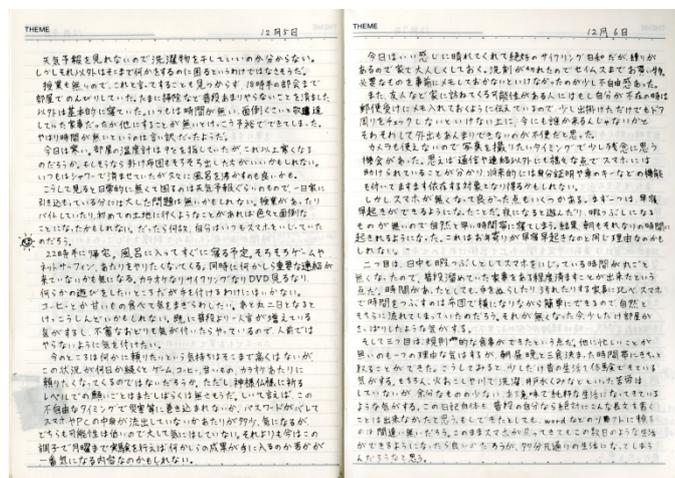


図2 実験期間中の日記

その結果、外部の情報をほとんど遮断したことでより3日目あたりから少しずつ考察を行うことが多くなった。それは自分自身のことであったり、世の中の事象についての自分の意見であったりと様々な内容であったが、確かに普段の生活よりも深く考えを巡らせることができた。よって、人間は外部からの情報を遮断することで自然と自分の内側に気持ちを向ける傾向があると結論付ける。

6. 施設の提案

上記の条件を満たす宗教施設について構想した。その結果、阿蘇のカルデラ地帯全体を宗教施設の敷地とした。この対象地区内の居住者は別の地区に転居してもらい、人工物を排除する。対象地区の選択理由としては常に噴煙を上げている阿蘇山を囲うように山々が連なり、自然の雄大さと過酷さを感じることが出来る

からである。加えて外部と隔絶された空間であり、俗世間から離れることのできる場所だからである。また、それらをより一層感じやすくするために、敷地内は人間の手を一切加えない空間とした。これはうっそうと木々が生い茂る樹海に噴煙をあげ、火山灰を降らせる山々が広がる本来の自然そのままの空間である。

まず、参拝者はふもとにある町から橋を渡り、門をくぐりぬけることで宗教的空間に足を踏み入れることとなる（図3）。

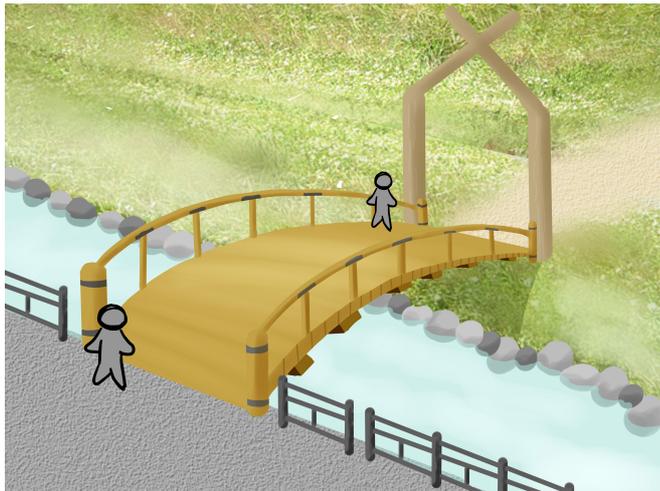


図3 宗教施設の入り口

そして図4に示すように定められたルートを通り、カルデラ外輪山頂上である三角で示された地点に移動する。ここには山小屋があり、内部に設置されたロッカーにスマートフォンなどの通信機器及びコンピュータを預ける。同時に簡単なサバイバル知識の講習とカルデラ内の簡単な地図の配布を行い、その先に待つ未開の地で生き残る術を学ぶ（図5）。

また、ここを出てひとたびカルデラ内に踏み込むと、

再びこの山小屋に戻ることができるのは5日後である。

それまでの期間は、参拝者が人間本来のもつ恐れを知ることと自身の内側に気持ちを向けるのに必要なものである。

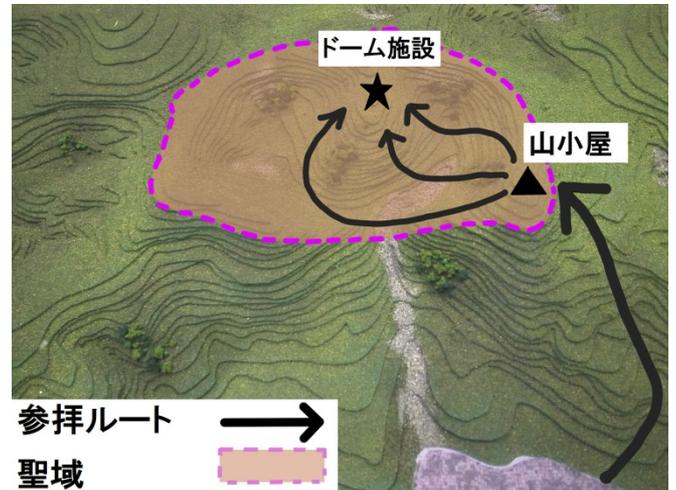


図4 阿蘇のカルデラ地帯

そしてカルデラ中央の阿蘇山山頂付近には、ドーム型の施設を設置する（図6）



図6 ドーム型の施設

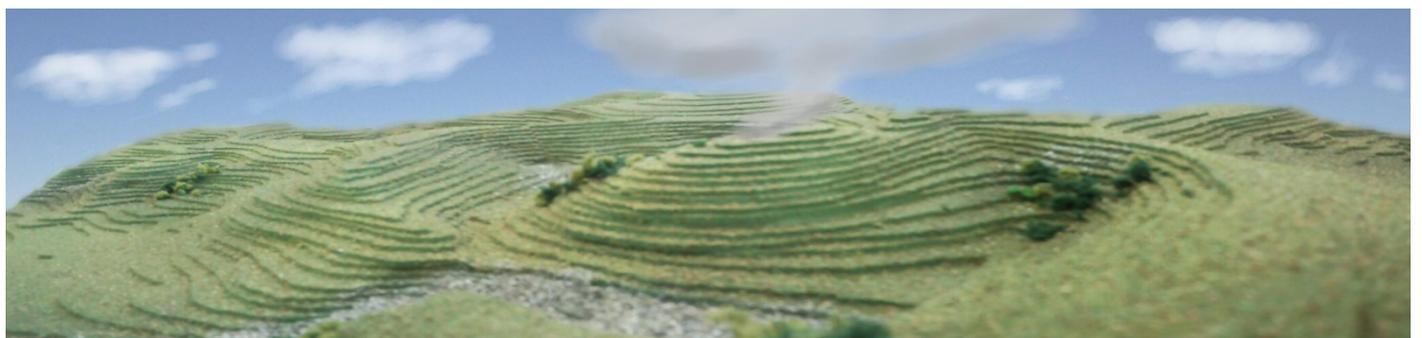


図5 山小屋から見た風景

サバイバル知識を得て未開の地に放り出された参拝者は、その後さまざまなルートを自らの力によって切り開き、最終的には図4上部の星マーク付近に存在するドーム型の祈りを捧げる施設に地図を頼りに向かうこととなる。

この施設は今回提案する宗教的空間の中核をなすものである。参拝者はこの施設内で神様に祈りを捧げることとなり、これは現在の神社における「拝殿」の役割を果たす。

施設内部構造としては、中央に円形の台座が置かれその中心に水の湧き出る甕が鎮座する(図7)。人工的な照明は無く、天井の穴から差し込む光がその水面を照らし出し、その反射により天井にゆらゆらと影を作り神聖さを演出する。

また、円形の台座には溝が掘られており、そこを水が流れることで発生する音を空間内に反響させる。

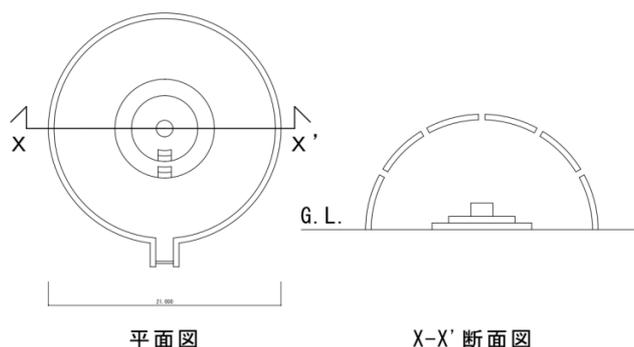


図7 施設の図面

天井には五つの穴が空いており、そこから施設中心の甕に向かって日光が差し込む。ここでは太陽を信仰するにあたり、具体的なものとして穴から差し込む日光に対して祈りを捧げる。そして甕に張られた水は日光を浴びることで、聖水としての宗教的価値を確立する(図8)。

祈りの捧げ方に決まりはなく、日光に向けて手を合わせたり座禅を組み精神を統一したり、聖水を飲むことで身を清めたりするなど参拝者一人ひとりに合った祈りができる空間である。さらに、神聖な空間なので夜間にこの施設内で寝泊まりすることは禁じられている。

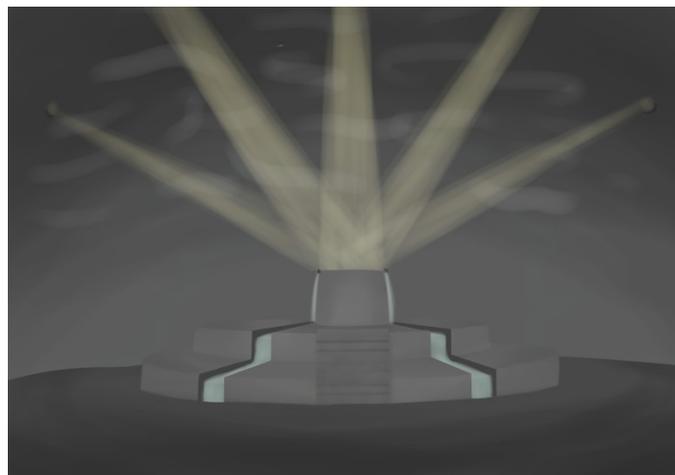


図8 施設内部の風景

また、台座部分以外は他の設備は無く完全に祈ることだけに特化し、参拝者が別のものに意識を奪われなないように配慮してある。ここで祈り、自身の内省を促すのがこの宗教施設参拝の最大の目的となる。

ドーム型の施設に到着する頃には既に様々な苦勞を乗り越えてきているので、そこでは普段よりはるかに深い祈りをささげることができ、同時に参拝者自身の生きる力を飛躍的に高めることにつながる。

その後は残りの数日間、引き続きサバイバルを経験するとともに何度も祈りを捧げることでこの宗教的空間での自身の成長をより確かなものとする。そして5日後に外輪山山頂の山小屋で持ち物を受け取り、もといいた世界への帰路につく。

この経験により、もといいた世界に戻ってからも鍛えられた内面を基盤としたよりよい生活を送れるようになる。加えて災害などの緊急時、ロボットやコンピュータが機能しない状況に陥った際に生き残るための能力を身に着けることもできる

8. 結論

以上により、100年後における宗教施設のありかたとは、何でもできると思込んでいる人類の傲りを抑え、謙虚な気持ちを忘れないようにするだけでなく、緊急時に機械に頼らなくても生き残ることのできるスキルを身に着ける役割も担っているといえる。技術だけが発展した世界に未来は無く、このように技術を操る人間自体も成長していくことが、今後の社会の発展には必要不可欠である。